

Title	臨床の知としてのフィールドワーク : 文化人類学の リアリズムを再考する
Author(s)	高橋, 巌根
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 129-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5668
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

臨床の知としてのフィールドワーク

――文化人類学のリアリズムを再考する―

会会

その成立根拠を問う「倒錯的戦略」(蓮見重彦)である。 といた (人類学が現在抱えている問題の一つに「民族誌的リアリズム」を維持し続けることはもはや不可能だが、リアリズムを的リアリズム」を維持し続けることはもはや不可能だが、リアリズムその的リアリズム」を維持し続けることはもはや不可能だが、リアリズムそのの否定は不徹底に終わっている。筆者の主張は、確かにいわゆる「民族誌のでを否定するのではなく、それを少なくとも次の2つの条件と照らし合めので方ではなく、それを少なくとも次の2つの条件と照らし合めのでカーレベルの考察を主とする社会科学に残りつづけている近代主義的サアリズム」を維持し続けることでないにもかかわらず、リアリズムを的サルスのではなく、それを少なくとも次の2つの条件とは、アリズムを背景的枠組みの中での民族誌の流れでは、これを否定し別の方法(とくに解釈学文化人類学が現在抱えている問題の一つに「民族誌的リアリズム」への疑をした。

キーワード

リズムの〈更新〉臨床の知、近代主義的枠組み、民族誌的リアリズム、倒錆的戦略、リア

高橋 巌根

有効な答えを見いだせないままでいる。
「今日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆今日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆今日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆今日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆今日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆々日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆く日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆でごく最近のものではないが、文化人類学者はいまだそれに対しているが、文化人類学者はいまだそれに対している。

確かにポストモダニストと呼ばれる文化人類学者たちが、マリノフスキーの時代以来、文化人類学者の現地調査を支えてきたパラダイムの一角をなす「民族誌的リアリズム」を批判していることはよく知られている。後にとりあげるように、こうした立場をさらに徹底させて、そのようなリアリズムの完全放棄を訴える論者もいる「杉島 一九九五」。しかし筆者は、リアリズムの放棄は文化人類学じたいの自己否定につながると考える立場をとる。必要なのは、リアリズムを放逐することではなく、わたしたちが採用してきたリアリリズムを放逐することではなく、わたしたちが採用してきたリアリリズムを放逐することである。筆者は、杉島氏がとるような、リアリズムを放逐することである。筆者は、杉島氏がとるような、リアリズムを放逐することである。筆者は、杉島氏がとるような、リアリズムを放逐することである。

とるべきであると考えるのである。アリズムをいったん肯定し、その成立根拠を問い続けるという形を

リアリズム再考のための〈臨床の知〉

れは、チェーホフの小説『手帖』の一節が引かれている箇所である。としたいと考えているのが、哲学者中村雄二郎が提起した〈臨床の知〉の思想である。この思想を簡潔に述べた氏の著書『臨床の知とは何か』じたいは新書版ということもあり、哲学の専門的な領域での新しい知見を述べたものではないが、氏が哲学者としての経歴をの新しい知見を述べたものではないが、氏が哲学者としての経歴をの流によって統一的に論じられている点で重要な著作であると言うことができる。〈臨床の知〉が新しいリアリズムにとっての出発点となることを象徴的に示す箇所が、まさにこの書の冒頭にある。そとなることを象徴的に示す箇所が、まさにこの書の冒頭にある。そとなることを象徴的に示す箇所が、まさにこの書の書のと思えている。

た。》[中村 一九九二:二]なって人々が気がついてみると―当の主人公を招くのを忘れていいをするやらで時間の経つのを忘れた。食事も終わろうという頃には、ちょうどいい機会とばかり、てんでに自慢をするやら、褒め合は、ある控えめな男のためにお祝いの会が開かれた。集まった人々

ここで、「集まった人々」を既成の理論や学問、「招かれなかった主

人公」を〈現実〉であるとすると、チェーホフのこの短編は両者の人公」を〈現実〉であるとすると、チェーホフのこの短編は両者のが文化人類学の今日の「危機」と言われているものと密接な関係がが文化人類学の今日の「危機」と言われているものと密接な関係があるのではないかと考えられるのである。話を文化人類学にこと寄せてみれば、構造主義、ネオ・マルクわらず、〈現実〉を研究の場に必ずしもうまく招き入れることがでわらず、〈現実〉を研究の場に必ずしもうまく招き入れることがでわらず、〈現実〉であるとすると、チェーホフのこの短編は両者のあるのではないかと考えられるのである。

もっとも各種の思想、いくつもの思考の試みを〈現実〉の解明に をいかもしれない。マリノフスキーが『呪術・科学・宗教』 「Malinowski 1954 (一九四八)」やその他の民族誌の中で、未開人 の「生」という言葉を使うとき、どのようにしたら観念や単なる表象によってそれを見失わないようにできるのかという問題意識があ 象によってそれを見失わないようにできるのかという問題意識があると推察されるのである。

を克服するための道は人類学における人間の復活にあ」るとしていとなっている「学会名称変更問題」に関して、中村光男氏は「危機でである。ごく最近にも、この学問を対象とする学会で焦眉の課題のことなのだろうか。通常、文化人類学を含めた人間諸科学の危機のにとなのだろうか。通常、文化人類学を含めた人間諸科学の危機次に、ここで〈現実〉という呼び名で呼ばれているものは一体何次に、ここで〈現実〉という呼び名で呼ばれているものは一体何

を伝える努力が必要であると結んでいる[河合 一九九三]。間理解の新しいパラダイムとして紹介してこのパラダイムの大切さを対象としたブックガイドの最後の章で『臨床の知とは何か』を人るし[日本民族学会 一九九五:五三]、河合隼雄氏は心理療法家

受けとめながら〉振る舞うということである。しかし、ここで気を ■章の〈経験〉と〈実践〉についての議論であろう。ここでは、氏 の言う〈現実〉の第二、関係の相互性が重視されている。中村氏は を験が経験となるために必要な条件として三点を挙げているが、そ のうちの二点が相互性と関連している。そのうちの一つは自己が何 かの出来事に出会って〈能動的に〉振る舞うということであり、い のうちの一つは自己が何 がの出来事に出会って〈能動的に〉振る舞うということであり、い に のうちの一つは自己が何 のうちの一つは自己が何 のうちの一つは自己が何 のうちの一つは自己が何 のうちのおいるの結果として返ってくる〈他者からの働きかけを ま一つはその行為の結果として返ってくる〈他者からの働きかけを をまずまな理論の中で、文化人 の条件なのである。

> 成立する営みであることが、ここでも重視されている。 事の結果を冷静に分析的に書き留めるという理性的な作業であるば て通るわけにはいかない。つまり、記録をとるということが、出来 要因となる。書き進めていけば、思い出したくないような不愉快な かりではなく、自分の身体や感情を媒介にすることによって初めて 出来事や自分が犯した手痛い失敗を蒸し返し再体験することも避け でさえ消耗しやすいフィールドワーカーの疲労を倍増させかねない 成は、自分の慣れ親しんだ土地ではない異質な環境下にあってただ 鈍化を防ぐ。このような条件を満たすためのフィールドノーツの作 フィールドの文化や慣習に対する過度の慣れによって起こる感覚の 頼らずに出来事を再生することを可能にするための処置である。③ うな出来事が重要であるとわかったような場合、あいまいな記憶に も漏らさない。①と②は、後で実はそのときは考えもしなかったよ やショッキングな出来事ではない、ごく当たり前に思える出来事を する。②ついつい目が向かいがちな、いわゆるエキゾチックな風俗 い上げ、自分の仮説に都合の悪い知見を無視することのないように ①自分が関心をもっている問題ではないことに関わる出来事をも拾 いうものではなく、いくつかの狙いがある。それを順に列挙すると である。もちろん「網羅的」と言っても何から何まで書けばいいと ツをまとめる際には、網羅的な記録を目指すということが肝心な点

大いにあり得る。その場合に、何がそれを回避するための基準とししても、その量が一人の人間に可能な範囲を上回ってしまうことはしかし、上の条件を満たしながら「網羅的」に記述を蓄積したと

化概念がフィクションなのが問題なのではなく、そのフィクションと、
は経験科学の概念としてはあまり適切とは言えなくなってきたるいは経験科学の概念としてはあまり適切とは言えなくなってきたのではないかという問題提起を踏まえれば、このことはもはや文化のではないかという問題提起を踏まえれば、このことはもはや文化概のではないかという問題提起を踏まえれば、このことはもはや文化概のではないかという問題を対してあるいは、文化の枠組みとして概念がフィクションなのが問題なのではなく、そのフィクションを、文化の枠組みとのではなく、そのフィクションと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、大概会がフィクションなのが問題なのではなく、そのフィクションと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化の枠組みと、文化のではないます。

が現実との結びつきを欠いていることが問題なのである。)

をこで、フィールドワーカーの身体的な経験や実践に対して、〈限 に、主体の能動的な行為の結果が対象を通して主体の身体に跳ね返る形 ま体の能動的な行為の結果が対象を通していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対 をいった要素を持ち込むことを意図していない。 なる。これが、中村氏が相互性に対して与えるいわば但し書 で、主体は〈受苦〉を甘受しなければならない。それは、単純に精 神的な苦悩ばかりではなく、精神=身体の全体にしみわたる感覚で 本のに動いな行為の結果が対象を通して主体の身体に跳ね返る形 で、主体の能動的な行為の結果が対象を通して主体の身体に込むたる感覚で 神的な苦悩ばかりではなく、精神=身体の全体にしみわたる感覚で かる。

がしだいに形成されていくという側面も理論の中に含めるべきであ経験するものと考えがちだが、経験が蓄積されることによって自己経験による自己の限定である。通常、私たちは、自己という主体が〔[註] ここでは、〈限定〉は2つの意味で使われている。一つは、

ているということ。) 係に起きるわけではなく、その双方ないしどちらかと密接に関わっ為や世界で起きている出来事が、それが起きている場所や時と無関たをすれば〈トポスの知〉とも呼べるだろう。私たちのしている行るということ。いま一つは、空間的・時間的な限定で、別の言いか

ここで注目しておきたいのは、こうした知のありかたが理論的一にたつ方法にほかならないという点である。もちろん〈臨床の知〉自体がそうした性格を帯びているのだが、この知の形態をこの文脈自体がそうした性格を帯びているのだが、この知の形態をこの文脈の中で限定すれば、それは〈トピカ〉の知と呼べる知の系譜である。り、キケロを経由し、近代ではヴィーコがその代表的な論者である。り、キケロを経由し、近代ではヴィーコがその代表的な論者である。ある事例、あるトピックは、論理的に整序された議論や体系的に組ある事例、あるトピックは、論理的に整序された議論や体系的に組あるれた技術を用いて扱うことはできない。そうした論理や体系からすり抜けてしまうもの、それに対して西欧の哲学は〈賢慮〉(フロネーシス[ギリシア語]、ブルーデンティア[ラテン語])を用いるのだとしてきた。だが、筆者は哲学を専攻する者ではないので深るのだとしてきた。だが、筆者は哲学を専攻する者ではないので深いたつ方法にほかならない。それに対して西欧の哲学は〈賢慮〉(フロネーシス[ギリシア語]、ブルーデンティア[ラテン語])を用いるのだとしてきた。だが、筆者は哲学を専攻する者ではないので深いたつ方法とは対している。

に、この思想が未開による文明への批判という従来からの定形的パ近代西欧思想の主流とは異なる系譜を形成している点にある。ここ(つまり、その内部に留まっている)という状態にありながらも、それは、この思想の流れが完全には近代西欧の外部に位置しない

入りするのは避け、ここではこうした知の潮流に着目する理由だけ

は挙げておくことにしよう。

日本語版序文には次のようなことが述べられているからである。とりあげて論じてもよかったはずであり、その方が文化人類学を専とりあげて論じてもよかったはずであり、その方が文化人類学を専とりあげて論じてもよかったはずであり、その方が文化人類学を専とりあげて論じるのは適切ではない。青木保氏は『ローカル・ノレッジ』の邦訳の解説の中で、「ギアツの方法の可能性と限界」としてローカル・ノレッジ』の邦訳の解説の中で、「ギアツの方法の可能性と限界」としてローカル・ノレッジ(「地方の知」という〈トポスの知〉)の理解と近代主義的人文・社会科学の大問題との結びつけの困難についてでローカル・ノレッジ(「地方の知」という〈トポスの知〉)の理解と近代主義的人文・社会科学の大問題との結びつけの困難について言及している。「ギアーツー九九一:四一九ー四二〇」。しかし、ギアツ自身がそうした困難を自分(あるいは自分たち文化人類学をある。そうでなければ、代わりに「厚い記述」などのギアツの思想をある。そうでなければ、代わりに「厚い記述」などの非である。

どれほどまで関わるかの判断は、読者に委ねられている。一般化の落と体、国家全体について語ろうとする。特定の位階制、特定の農業システム、特定の信仰パターン、特定の権力体系の研究によって、まあらゆる位階制や農業や宗教や政治、その一般について語ろうとする。しかしその語り口は間接的で不明瞭で頼りなく、遠回しな指摘にとどまることが多い。この村、あの部族の研究によって、民当てようとするる。とかしその語り口は間接的で不明瞭で頼りなく、遠回しな指摘にとどまることが多い。この村、あの部族の研究によって、民当にようとするものが何であれ、ある著作の語ることがその対象にどのようなかたちでが何であれ、ある著作の語ることがその対象にどの大きな問題に光を当てようとする。

可能性は、眺める側にあるのである。」

「ギアツ 一九九〇:iii]

近代主義の中に還元することによってしか意味をなさないことになれは文化人類学者の責務ではない。だから、してもしなくてもよいい。さらに、青木氏も触れているように、ギアツは別の箇所でレビニストロースの「決定論」的な知の枠組みを退けようとする。[Geertz 1973:三四五ー三五九]。しかし、まさにこの点が青木氏の論評の最も肝心なところなのだが、ヘルムスによるバリの王の葬儀の描写 [ギアツ 一九九〇:一一五 - 一一九] の例のように、民族誌的記述がある意味で西欧から見た異文化に対するエキゾティシ族誌的記述がある意味で西欧から見た異文化に対するエキゾティシが、大人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、そもちろん、文化人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、そもちろん、文化人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、それは文化人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、それは文化人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、それは文化人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、それは文化人類学者の情報では、まさによってもいる。

知性を備えた者はまずほとんどこの学会(文化人類学)にはいないに言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性に言葉を選んで表現したように、これは限界である。だが、青木氏が周到以降の文化人類学自体が抱えている。

る。

意識にのぼりようもないということである。)言えることは今のままではギアツを踏まえた「ギアツ後」など問題仮のこの言葉にいくぶんかの誇張が含まれていたとしても、確実にといってよい」そうである「ギアーツ 一九九一:四一三-四一五]。

のである。
〈臨床の知〉で、〈選択〉や〈決断〉を重視するというとき、その行為をフィールドワーカーの身体を通して行うミクロレベルの条件があることも忘れてはならないの行為をフィールドワーカーの身体を通して行うミクロレベルの条のである。

リアリズムの放逐か、更新か

否定するということは実は杉島氏が考えるほど簡単なことではないの声を代弁することによって支配し圧倒することになるという非民の声を代弁することによって支配し圧倒することになるという非民の声を代弁することによって支配し圧倒することになるという非知のように、民族誌を書くという作業を独占する文化人類学者が住知のように、民族誌を書くという作業を独占する文化人類学者が住知のように、民族誌を書くという作業を独占する文化人類学者が住知のように、民族誌を書くという作業を独占する文化人類学者が住力リフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威を関するというによりによりに対している。

との関連で問い、その回答を自らの思想として提示するほかない。」
「私たちはその目的や理由を自分のおかれている社会的状況
「和定とは、このパラダイムを拠り所として研究を続けてきた
人類学者の共同体を一時的にせよ大きく揺るがし、その結果この共
「和たちはその目的や理由を自分のおかれている社会的状況
と言
との喪失状態をもたらす」
「合田・大塚
一九九五:二〇八」と言
と言
との関連で問い、その回答を自らの思想として提示するほかない。」

のの放逐につながると自動的に言えるわけではない。はもはやできないであろう。しかし、そのことがリアリズムそのも世紀の文化人類学が掲げてきた民族誌的リアリズムを維持することや島氏は、これがリアリズムの放逐なのだと言う。確かに、二十

[合田·大塚 一九九五:二〇八]

に立つよりもむしろ、リアリズムそのものを再考することによって誌的リアリズムに代わる方法を模索するとき、反リアリズムの立場ちろん筆者は試行錯誤の努力が惜しくてこういうのではない。民族本当に、彼の言うような試行錯誤しか道はないのであろうか。も

۰,

道を切り開くべきではないかと考えるのである。

るという重荷は逃れようがない。それがどんなに重みを増したとしある。この点について、ギアツは『作品と生』の中で、「著者であとによって、記述に対する責任もまた曖昧になる恐れがあるからでうことに関しては微妙な問題がある。なぜなら、権威を否定するといもっとも、この、民族誌を記述する側の「権威」を否定するとい

1988:一四〇]と述べている。 …『ひとびと自身』へと転嫁させることはできない」[Geertzても、『方法』や『言語』や…あるいは共著者として再描写された

るだけに、余計に大きな矛盾である。 るとはいいがたい」[合田・大塚 一九九五:二○五]と断じていストモダニスト」たちの議論はリアリズムの引力圏から離脱していら徹底していない。しかも、このことは、氏がこの論文の前段で「「ポら徹底していない。しかも、このことは、氏がこの論文の前段で「「ポら徹底していない。しかも、このことは、氏がこの論文の前段で「「ポ

ここでの議論に好都合なことに、蓮見氏はこの批評の中で、中村ではないか、と蓮見氏は主張するのである。敗れ去る。それならば、われわれとしては「倒錯的戦略」をとろうするだけなのだ。正当性をもつはずの批判が、陳腐なリアリズムに仮リアリズムはひそかにリアリズムに後ろから加担し、それを強化反リアリズムはひそかにリアリズムに後ろから加担し、それを強化

蓮見氏は、「物語は勝利する」と断言し、反リアリズムを退ける。

、。

「哲学の現在」をとりあげている。この著書と『臨床の知とはの『哲学の現在』をとりあげている。この著書と『臨床の知とは氏の『哲学の現在』をとりあげている。この著書と『臨床の知とは氏の『哲学の現在』をとりあげている。この著書と『臨床の知とは氏の『哲学の現在』をとりあげている。この著書と『臨床の知とは

制度、目に見える制度に劣らず重要」であると言い、不可視なもの無意識につくられた、目に見えない制度」が「意識的につくられた中村氏は『哲学の現在』で、「歴史のうちで私たち人間によって

への凝視の必要性を主張している。この不可視なものこそ、後の〈臨れの類〉にあたるものである。ここで、蓮見氏は、そうは言ってもなぜ不可視が可視から識別されなければならないのか、と問う。リアリズムが不可視について言及することを避けながらも)「倒錯かれる境界線をそのまま肯定してしまい、はじめからこの線がいかかれる境界線をそのまま肯定してしまい、はじめからこの線がいかかれる境界線をそのまま肯定してしまい、はじめからこの線がいかかれる境界線をそのまま肯定している。この不可視なものこそ、後の〈臨りでリズムに対して(それを否定することを避けながらも)「倒錯的戦略」を採る理由なのである。

長に不可視のものがあるとすれば、それは、この捏造された境界線を信仰することがなくなった瞬間、それまで可視、不可視とされは、リアリズムへと更新されるプロセスの始まりでもあるはずである。と民族誌記述を再考するための拠り所として、〈臨床の知〉をとりあげてみようと考えている。しかし、そのことは基本的な枠組みにおいてそれを肯定するということを必ずしも意味しない。既に述べてきたように、近代主義的な決定論的枠組みの意外な求心力の強さやリアリズムじたいの不徹底という障害を考えれば、そのことはを易に頷けることと思う。むしろ、筆者が意図しているのは、少なくともこの二つの問題点(障害は他にもあるかもしれないが)に照くともこの二つの問題点(障害は他にもあるかもしれないが)に照くともこの二つの問題点(障害は他にもあるかもしれないが)に照くともこの二つの問題点(障害は他にもあるかもしれないが)に照くともこの二つの問題点(障害は他にもあるかもしれないが)に照くともこの二つの問題点(障害は他にもあるかもしれないが)に照めまがある。

を考えれば、決してつながりをもたないことではないだろう。るが、不徹底なリアリズムがまさに近代主義の中から出てきたことくことである。二つは一見互いに結びつかないことのようにも思えそれをあくまで近代の枠組みの外部に置かない状態で、徹底してい

引用文献

Geertz, Clifford 1973. The Interpretation of Cultures, NY: Basic Books, Inc.

ボアツ、クリフォード(小泉潤二訳)一九九○ 『ヌガラー一九世紀バリの劇場国家』、東京:みすず書房(Negara: the theatre state in nineteenth-century Bali, New Jersey: Princeton University Press, 1980)

pretive Anthropology, NY: Basic Books, Inc., 1980)
pretive Anthropology, NY: Basic Books, Inc., 1980)

Geertz, Clifford 1988. Works and Lives: The anthropologist as Author, Stanford, California: Stanford University Press.

蓮見重彦 一九八五(一九七九)『表層批評宣言』、東京:筑摩書

₹

む』、東京:日本評論社河合隼雄 一九九三 『ブックガイド心理療法-河合隼雄が読

Malinowski, Bronislaw 1954(1948). Magic, Science, Religion

and other essays, Garden City, NY: Doubleday Anchor

佐藤郁哉 一九九二 『フィールドワークー書を持って街へ出よム、学会名称変更提案関連資料Ⅱ、東京:日本民族学会日本民族学会 一九九五 『民族学研究』第60巻別冊、フォーラ中村雄二郎 一九九二 『臨床の知とは何か』、東京:岩波書店中村雄二郎

う』、東京:新曜社佐藤郁哉 一九九二 『フィールドワークー書を持って街へ出よ

Fieldwork — knowledge as the clinical

Iwane TAKAHASHI

One of the problems which cultural anthropology hold at present is the question to (ethnographic realism). Recent arguments on this matter tend to completely deny it and replace it with another method, especially with the interpretive method. Though their attempts have began in the decade before, the denial of realism has not yet been thorough. Certainly, I agree with them in that it is impossible to maintain the so-called (ethnographic realism), but the right way is not the denying of realism itself but the renewing it in reference to at least the following two conditions. One of them is problem of locating ethnography in the modernist framework of knowledge which continues to remain in the social sciences concentrating on the macro-level analyses (that is, those except cultural anthropology), and the other is the "perverse strategy" (by Shigehiko Hasumi) which never denies realism but keeps questioning how it has come to generate.

Key Words

knowledge as the clinical the modernist framework of knowledge ethnographic realism the perverse strategy 'renewal' of realism